（嘉永六年）から一八五五年（安政二年）までの四つの覚書集とそれぞれの添書から成り立っている。巻末には詳細な解説とドンケルの略歴があり、文献目録からは当時の諸問題を巡っての内外における研究の状況がうかがえる。人名、件名索引は綿密に作成され、それはおよそ一七〇ページにも及ぶ広範な資料への取り組みを容易にしている。冒頭には数枚の写真、版画などが載せられており、主要な登場人物とその舞台への「視覚的な接近」をも可能にしてくれる。

当時のことは歴史書や学術論文では通常大まかな骨格が粗描されているに過ぎない。本書では読者の眼前に繰り広げられた資料によって歴史との関わりを楽しくする肉付けがされている。ドンケルという人物を生き生きと描写し、商館と長崎当局との関係に見られる建て前と本音や、長崎湾に入港するロシア、イギリス、フランス艦隊の内部事情をも明らかにして、幕末の外交に対する理解を深めてくれる。医学史に興味を持つ読者なら、西洋医学や化学の紹介で著名なドクトール・ファン・デン・ブルック〔J. K. Van den Broek〕と本書で再会できることを嬉しく思うであろう。

筆者はこの本を一気に読んでしまった。丁寧な訳文に解説付きこの著作によるフォス氏の功績は大きい。「外圧」苦しめられている今日の日本を考える際にも、この本は様々な刺激を与えてくれるであろう。一読をお勧めしたい。

（ヴォルフガング・ミヒェル）

〔新人物往来社・東京都千代田区丸ノ内三―三―一新東京ビル、電話〇三―三二一二―三九三一、一九九二年、四六判総二二三ページ、定価四、八〇〇円〕

坂井建雄著『からだの自然誌』

著者は一九五三年生れ、一九七八年に東京大学医学部を卒業、臨床研修を受けずに、東京大学で解剖学を専攻され、現在順天堂大学医学部の解剖学教授である。人体解剖学を学生に教育指導され、腎臓と血管系の微細構造を機能的な側面から研究され、ドイツにおける比較解剖学の伝統あるハイデルベルク大学に留学され、解剖学のすべてが研究分野であるといわれ、若い研究者を指導されている。

本書の文章の中で「人体と細胞とがそれぞれ自律的に複製する明確な単位であるということを考えたとき、人体を中心とする生物学と細胞を中心とする生物学が、それぞれの目標に向かって進みながら、たがいに補充し合うという時代がまさに始まりつつあるように思える。人体の形態学と細胞の生物学はこれからの解剖学を支えるべき二つの柱である。と、又解剖学が扱う人間の身体はわれわれひとりひとりにとって、かけがえのない切実なものである。そして解剖学には、われわれが自然に対してどのように立ち向かい、自然科学という知の体系を導きだすことができるかという、本質的な問題が集約されている。解剖学は医学の中のもっとも古い分野であるが、人体という生命的な自然にとりくむ自然科学の最

前線に立っているのである。」等論じている。

これらの点から著者は医学を考える解剖学者であり、細胞生物学の研究者で、この両者を持ち合わせる数少ない現在の解剖学の研究者である。

「からだの自然誌」の題名からナチュラル・ヒストリー＝自然誌は医史学の研究者が読んでみたいと思う題名の本である。解剖学の知識がなくても医史学に興味を持たれる会員には一読をおすすめしたい本である。後述の各章の紹介でもわかるように、各章はサブタイトルがつき、二者または三者を比較対比して論じ、歴史的背景が考慮されている。一般の解剖学教科書とは異なり、解剖学の一分野にかたよらず、肉眼解剖学、比較解剖学、発生学および光学顕微鏡的、電子顕微鏡的、分子的、生化学的形態学、細胞生物学など解剖学の全分野にわたって一冊の本にまとめられている。写真、図、表も豊富で解剖学担当者以外の読者に親しみやすく、理解しやすい著書である。

本書は八つの章から構成されている。

第1章　ヴェサリウスとハーヴィー　医学の基礎としての人体解剖学　1現代医学の原点　2ヴェサリウスのファブリカ　3ハーヴィーと血液循環の原理　第2章　解剖学と生理学　人体についての自然誌と自然哲学　1自然誌と自然哲学　2解剖学と生理学　3認識論の2つの傾向　4自然誌のあり方　第3章　生物形態の意味㈠　解剖学における機能論と先験論　1解剖学の3つの思想潮流　2アカデミー論争の両雄　3機能形態学と先験的形態学　4アカデミー論争の残したもの　第4章　比較解剖学と進化論　生物科学における事実と解釈　1動物を解剖することの意味　2医学と比較解剖学　3解剖学と進化論の関係　第5章　生物形態の意味㈡　顕微解剖学と物質論　1顕微鏡技術の進歩と顕微解剖学の発展　2顕微鏡技術の世界　3顕微解剖学の枠組み　4物質論的な立場　第6章　生物界における階層性　多様性と反復可能性の問題　1物質論の限界　2生物現象の再現可能性と階層性　3生物現象の階層性と形態の見方　第7章　解剖学と時間　個体発生と系統発生　1時間と空間の扱いかた　2生物現象の時間　3個体発生と系統発生　第8章　解剖学の現在　人体という自然をめぐって　1人体を解剖するということ　2医学における解剖学教育　3解剖学における研究　4解剖学を支える人たち

以上内容を詳しく紹介したのは著者が「問題は多岐にわたっているが、これらのすべてを通じるのは、解剖学が、自然誌的な要素をきわめて濃密にかかえた学問分野であること、そして自然科学がもたらす成果だけではなく、自然そのものに目を向ける自然誌的な視点が、われわれ人間にとってまさに必要なことではないかという問い掛けである。」と「人間の身体を含めて自然というものは人間の知恵の小ささを教えてくれる偉大な教師である。自然を前にして謙虚さを失えば人類は滅亡への道の第一歩を踏みだしたことになる。その謙虚さに立ち返るためのよすがとしてわたしは解剖学をこよなく

大切にするのである。」と結んであるからである。

最後のことばは人類、自然、地球を大切にするのであると私は勝手に拡大解釈した。

（永野　貞子）

〔東京大学出版会・東京都文京区本郷七―三―一東大構内、電話〇三―三八一一―八八一四、A五判一九八頁、二二六六円〕

小池猪一著『図説・日本の〝医〟の歴史』

著者は日本大学経済学部在学中、海軍予備学生から飛行科士官となり、敗戦後母校に復学し、近世史専攻。現在近世史史料研究所代表。

すでに共著として『海軍』全十五巻、『日本医学の夜明け』『海軍飛行予科練習生』全二巻、『海軍軍楽隊』『海軍特別年少兵』それに『海軍医務・衛生史』全四巻（昭和六十一年・柳原書店刊）という業績がある。

この著作の目的は「人を醫し國を醫し、人々を正しく導いた先賢医人の足跡」を世に残すことにあるという。気迫ある医学史書。

上巻は通史編、下巻は資料編からなり、七百ページ余。通史編第一章西洋医術伝来以前は①夜明け前の日本の医療②大陸医方受容の時代③専門医家の登場④李朱医術の普及と医学教育、第二章西洋医術伝来の時代①南蛮流外科伝来の時代②紅毛流外科伝来の時代までは五十ページにまとめられているが『紅夷外科宗伝』の成立について、パレの『外科全集』のシッペル版及びシュルテルの『外科の兵器庫』からの引用などの最新の研究知見も参考にしてほしかった。従来の定説は覆えっている。

第三章東洋医術の勃興は江戸初期の漢方医学の概略について六項目にわたり言及し、第四章実証医術勃興の時代は①医術から医学への移行時代②古医方派の興隆③腑分け事始め④蘭学事始めと解体新書⑤近代産科の発祥⑥江戸時代中期の医事。第五章は蘭学隆盛の時代では江戸派、上方派蘭学漢蘭折衷派の華岡青洲一門の紹介。ついでシーボルト在日六年間とその影響について先人の業績を要領よくまとめてある。第六章幕末・維新の医事では後期蘭方医学の影響下の各科の近代化への動向について述べている。二宮彦可の没年が不詳となっているが文政十年十月十一日に没してることは、すでに三十七年前に評者が報告してある朝川善庵撰の二宮彦可墓碑銘を参考にしてほしかった。⑤戊辰戦争と軍陣医療では最近発見の資料が引用されている。⑥明治・医事制度の転換、ついで第七章日本の医学自立時代への記述は著者の力の入れたところであり、特有の視点からの考察が見られる。

第八章医科器械の歴史第九章歯科の歴史第十章くすりの歴史とつづくが、読者層を、専門研究者が対象なのか、一般向けなのかその焦点のずれと、記述構成が多面にわたり過ぎたきらいがある。しかし、通史の各章にわたって収載されてある挿図・写真は著者が全国各地を廻り、自から調査撮影され